

「全少」を日本一研究する指導者による提案



第89回

養正館館長 渡辺貴斗

ZENSHOに 挑戦しよう!



ウチの子、もしかして発達障害?(その5) あの子ばかり、ズルい

★特別扱い? 配慮?

触覚や聴覚などの感覚が、普通の人よりも極端に敏感なタイプの人があります。冷たい水に触ることができないが温水なら大丈夫、みんなの大きな気合がうるさくて我慢できない、など、実際に過去にそのような子どもたちがおりました。最近、こんなことがありました。

2年前から密を防ぐため、座礼のとき1メートルずつ間隔を空けることにしています。道場には、1メートル四方のマットを敷いてあるのですが、マットとマットのつなぎ目の縦線の上に座るようにしようとみんなで決めました。すると、A君だけ縦線の上ではなくマットの中央に座っています。そこで、「線の上に座ってくれる?」とお願いしましたが、A君は〈どうしてもできない〉と拒否します。周りの子たちも、「早くしてよ」といった苛立った空気(いっど)に変わっていきます。私が冗談で、「もしかして線の上は、マットの隙間に落ちこちそう怖い?」と聞いたところ、意外にも「そう、落ちそう怖い」と答えました。そうしたら、隣の子が、「僕も学校から家に帰る時、地面のタイルのつなぎ目を踏まないように帰るんだよ」と答えました。そうすると、周りの子たちの空気が一変し、「先生、怖いんだって」、「A君は、マットの真ん中でもいいんじゃない

ですか?」と何人かが発言しました。「じゃあみんな、A君はマットの真ん中でいいことにする?」と聞くと、「いいよ、そうしよう」、「それでいいよ」ということになりました。子供たちからの提案でしたので、「あの子だけ特別扱いで、ズルい!」という雰囲気にはならず、無事、問題解決できました。

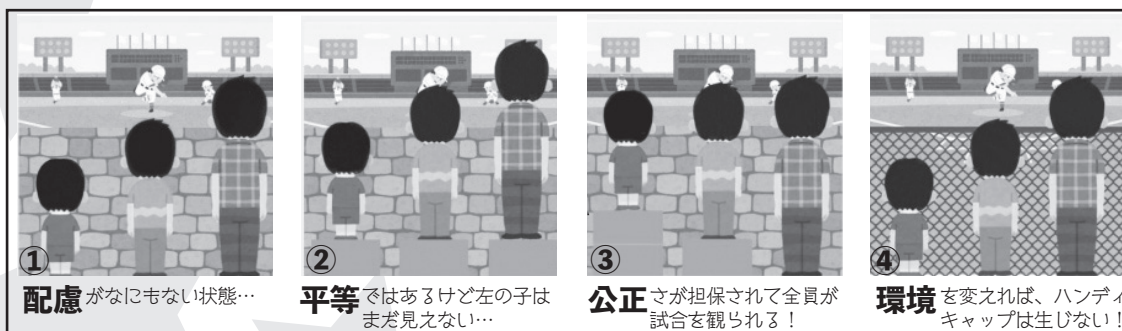
★公正さを担保する

先ほどの続きですが、全員、強制的に縦線(マットのつなぎ目)の上に座らせていたら、図①の「配慮がない状態」になって、A君は苦痛を感じます。

子どもたちの解決策は〈A君は真ん中に座ってもよいことにする〉でしたので、図③の「公正」に相当します。A君だけ真ん中に座れるよう配慮し、全員が問題なく正座することができました。

実は、私は子どもたちから何も意見が出なかった場合は、「全員、マットの真ん中に座るのはどうですか?」という答えを準備していました。これですと、〈A君だけ特別扱いした〉といったハンディキャップが生じずに問題解決できるからです。これは、図④の「環境を変えた」ことに相当します(しかしながら、今回は、あえて④を提案せず、子どもたちの考えを尊重し、③の公正を着地点としました)。

図④の「環境を変える」ことは、定型発達と呼ば



① 配慮 がないでもない状態…

② 平等 ではあるけど左の子はまだ見えない…

③ 公正 さが担保されて全員が試合を観られる!

④ 環境 を変えれば、ハンディキャップは生じない!

TEENS
「発達障害のあるお子様向け キャリアデザイン教育」より引用

「発達障害の小中高生を対象に、楽しみながら就職・自立への準備ができるサービスを展開」



<https://www.teensmoon.com/about/about/>

れる、発達障害でない多数派にも良い影響が出ます。なぜなら、定型発達の子たちの中にも、グレーゾーンの子どもたちが少なからず存在しているからです。

★環境を変える

図④のように環境を変えれば、ハンディキャップを生じさせずに全員に同じ指導ができますので、これがいちばん理想的ですね。しかしながら、どうしてもハンディキャップが生じてしまうこともあります。例えば足を骨折した子が登校する時は、松葉杖をついて歩かなくてはなりません。その痛々しい光景を見たクラスメートは、「おうちの人に車で送ってもらえばいいのに」と思うことでしょう。このように、子供たちの中から妥協案、解決案を出してもらおうと周りの理解が早いですね。指導者が「この子だけ車で送迎OKですが、君たちはダメですよ」などと一方的にルールを打ち出すと、子どもたちはまだ幼少ですので、「ズルいな」と反発する子どもでてくることでしょう。よって、困っている子へ配慮するときにはハンディキャップが生じてしまう場合は、解決案（配慮する具体案）を子供たちの口から言わせるようにすると良いでしょう。

骨折などは、子供たちにも理解しやすいですが、発達障害は目に見えない困り事ですので、指導者の工夫が必要です。特別な配慮をするときは、全体の理解を得る過程が1ステップ必要になります。

★子どもたちに言わせる

もうひとつ、子どもたちに解決案を考えさせた実例を挙げたいと思います。

先日、体験入門初日に来た年少の子（3月生まれの3歳）が、みんなで正座で黙想するとき、道場

の中をずっと走り回っていました。指導者が座るように促しても、理解できないのか指示に従いません。周りの白帯や黄色帯の園児たちも、目を開けてキョロキョロし始めます。私は黙想をすぐに中断して、「あの子ずっと走り回っているね、どうしたらいいかなあ？」と困ったそぶりを見せました。すると、「まだ3歳で赤ちゃんなので、少し走っても仕方ないと思います」、「今日はできることだけやればいいんじゃない」、「まだ小さすぎるので空手はできないと思います」のように様々な意見が出ます。「じゃあ、ひとまず、あの子は自由に動き回っても仕方ないことにする？どうする？」とみんなに意見を求めると、「まだ小さいから、しょうがないよ」といった空気になりました。その後もその子は自由に走り回っていましたが、みんなそのことに気を取られることなく集中して稽古ができました（結局その子は幼すぎたので、半年後に再挑戦することになりました）。

このような共通認識をみんなで事前に確認しておかないと、「先生は僕が走ると叱るのに、あの子はなぜ叱られないんだろう？」のように、一貫しない指導者の態度に、子どもたちは不満や不信感を募らせ、指導者の指示に従わなくなっていきます。こうやって、学級崩壊ならぬ道場崩壊につながっていくのです。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場で全国最多入賞を連続で記録する。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12



どうやって道場生 350名に増やしたか？ その 36

■弱者の戦略9 差別化(時間)

引き続き、弱者が強者に勝つための具体的な戦略を考えていきましょう。今回はサービスの差別化について考えてみます。缶コーヒーに「朝専用ワンダ」というものがありますね。中身ですが、実は通常の缶コーヒーと同じだそうです。ネーミングで差別化を図り販売数を増やしました。これに続くアイデアとして、昼食のあとの眠気覚ましコーヒー、深夜コーヒー、早朝コーヒーなどのバリエーションも考えられます。このように、時間の差別化、といった観点から考えますと、朝空手、昼空手、夜空手、深夜空手、早朝空手などといった教室を開くことも考えられます。アメリカから日本に

上陸した24時間型スポーツジムなどもありますので、深夜でも、早朝でも、ジム利用者が一定数いるということが分かります。これをヒントに考えますと、日本はこれからますます高齢化が進みますので、おじいちゃん、おばあちゃんをターゲットにした「早朝おはよういきいき空手」なども良いですね。30年前に上海に行ったとき見かけましたが、早朝から、おじいちゃん、おばあちゃんが公園で太極拳をやっていました。朝早くから大勢が集まっていたのを見て、驚いたことを覚えています。これを空手に置き換えればよいのです。早朝空手をやると、高齢化社会では多くの需要が見込めるかもしれません。青空のもと、外の新鮮な空気を吸いながらやれば、コロナ対策も不要です。このように、弱者の生き残りアイデアはまだまだありそうですね。